

されていなかつたのではないかと見られる。しかし、これは推定の域にとどまるので、本稿の最終形は本文とせず、下書き(二)の最終形を本文に掲げることとした。

用し、本稿の詩句の下書きと見られるものを、作品番号、題、日付のいずれもを付さずに、鉛筆の速書き文字で記入。そのあと鉛筆で手入れしつつ「草一」、「草二」、「草三」、「草四」と記入して順序立て、さらにこれに紫色鉛筆で手入れしのから⑦までの数字を記入して新たな順序を与えている。

### 三一三 産業組合青年会（本文一三七頁）

本篇は定稿形成立後さらに手を加えられて詩誌「北方詩人」に寄稿され、作者の死後同誌に掲載された（第六卷参照）。また本篇の一部を文語詩に改作したものが第七

巻所収「水部の線」である。

〈現存稿〉四。

草稿的紙葉群（三枚）、下書き（切抜き断片）、下書き（二）、定稿、以上五枚九面および切抜き断片二、ほかにメモ一。

〈生前發表〉なし。

ただし、昭和八年十月、「北方詩人」掲載形は作者生前

に送稿されていたもの。

〈本文〉定稿の最終形態に據る。

（逐次形）

（1）草稿的紙葉群

ここで草稿的紙葉と呼ぶ三枚の紙は、いずれも赤罫詩稿用紙で、いつたん他の用途にあてられていたものを転

本葉は、片面には鉛筆の大きな字で野にこだわらず次のように記されている。（第十五卷所収書簡246下書）

以下では、この三枚につき、一枚ごとに記述した上で、鉛筆で記された順序立てによる形態、および紫鉛筆で記された順序立てによる形態を示す。

（第一葉）  
右が斜線等により全部削除してある。最終行「義理も情もなき」の七字はゴムで消してある。  
今一方の面には、野の第一行から次のように本篇草稿詩句が速書きの鉛筆の文字で記され、一部は消しゴムを使つて書き直している。

唯々感泣致候 御在任中

右が斜線等により全部削除してある。最終行「義理も

（義理も情もなき者と被思召（以下空白）

御厚意に背くこと度々〔⑦↓にて〕定めし

（情もなき）の七字はゴムで消してある。

今一方の面には、野の第一行から次のように本篇草稿詩句が速書きの鉛筆の文字で記され、一部は消しゴムを

祀られざるも神には神の身土があると

さう云つたのはいったい誰だ

〔二行不明〕まことの道は誰が云つたの行つたのと『云ふ

↓さういふ風のものでない それはたゞそのみちみづからに属すると——答へたものはいったい何だ↓⑩〕

並木の松はかたちもわからず

5 つめたい雨は

宙でびびし鳴つてゐる

しかもときどきわだちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に畳む夜中の雲の

10 わづかな青い燐光による

〔約六字不明〕南に走りまことの道は〔△で消したあとで書

かれ〕

〔二行不明〕↓誰が云つたの誰が行つたのと

〔二行不明〕↓さういふ風のものでない

〔夜一二字不明〕は〔以下不明〕↓〔約七字下ヶ〕（祀られざるも↓

それはたゞそのみちみづからに属すると〕

〔二行不明〕↓（約八字下ヶ）神には神の身土がある）↓答へたものはいったい何だ

〔どれか東の一つの尾根だ（以下不明）↓（二行不明）↓⑩〕

〔約七字下ヶ〕（祀られざるも↓誰が（約十字不明）と云ふもの

〔約八字下ヶ〕神には神の身土がある 小（約十五字不明）す  
る）↓⑩〕  
〔（二行不明）↓まつくるな並木のはてで  
↓さういふ風のものでない それはたゞそのみちみづからに属すると——答へたものはいったい何だ↓⑩〕  
20 〔（二行不明）↓見えるともない遠くの町が  
〔（二行不明）↓ほんやり赤い火照りをあげる〕

紙面右端欄外余白、下寄りのところには「草一」と

鉛筆で記入してある。

右に対しても紫色鉛筆で次の手入れがなされている。

1 行の次 「⑦↓あざけるやうなうつろ『の↓な』声で」

4 行 「並木の松はかたちもわからず↓⑩〕

7 行 「しかも↓⑩〕ときどき〔⑦↓遠い〕わだちの跡で

15 行 答へたものはいったい「何だ↓誰だ」

さらに、次のように順序の指定をしてある。

12行の行頭に横線を引き、上方へ線を出してのと記入。

5 6行の行頭に横線を引き、上方へ矢印線を出してのと記入。

8 ～10行の行頭に横線を引き、上方へ矢印線を出してのと記入。

④と記入。

11～15行の行頭に横線を引き、上方へ線を出して ③と記入。

19～21行の行頭に横線を引き、上方へ線を出して ⑦と記入。

(第二葉)

本葉の表の罫冒頭約五行分には、最初、鉛筆の大きな字で罫にこだわらず次のように書きかけたものが、ゴムで消してある。(第十五巻所収書簡246の下書きかけ断片か)

拜復御懇書拝読唯々

感泣の

また、本葉裏の罫末尾約十三行分には、いつたん鉛筆のやや大きな字で次のように(おそらく左から右へ)記したメモが、ゴムで消してある。

◎

◎名鑑印刷の件門外不出。

◎閲写真(四字)より

◎中井氏阿部氏は諾

(これは、昭和五年十一月十八日付、阿部芳太郎宛書簡の内容と関係があると思われるメモである。第十五巻所収書簡28参考照)

びしゃびしゃの寒い雨にぬれ

かすかな雲の螢光をたよりながら

こんやわたくしが恋してあるいてゐるものは

いつももしらぬするものころのこの行の下方に「二字不明」〔う〕

つくしい」と記したのがゴムで消してある)

5なにか明るい風景である

まことにわたくしはこのまよなかの

松やいちゐに囲まれて

ほのかに睡るいちいの棟を

つきからつきと数へながら

10どこからともわからな「⑦→い」稻のかほ「⑦→り」に漂

ひ

つかれたこほろぎ「⑦→の声」や水の呟き

またじぶんともひともわかず

水たまりや泥をわたる跡音を

「ちがつた世界のひゞ(以下不明)」遠くのそらに聞きなが

し」

15「約八字不明」並木の(約十字不明)のは「」

から松が風を冴え冴えとし

銀どろが「風→削」雲を乱してひるが「(二字不明)→」

へるなかに

赤い鬼げしの花を燃し

黒いすももの実をもぎる

20頬うつくしいひと「ゞ→び」との

「(二行不明)」もなにか無心に語つてゐる」

明るいことばの「(約五字不明)」きれぎれを」

狂気のやうに「(約五字不明)」恋ひながら」

このまつ黒な松の並木を

25はてなくひとりたどつて来た

あゝわたくしの恋するものは

わたくしみづからつくりださねばならぬかと

(ここまで表)

わたくし「はゞが」東のそらに

(ここから裏)

「恋→削」声高く叫んで問へば

30「(二行不明)」そこらの黒い林から」

嘲るやうなうつろな声が

ひとりきの木だまをかへし

じぶんの「声→恋」をなげうつものは

やがては恋を恋する「ものと→と」

35さびしくひとり呟いて

「来→削」來た方をふりかへれば

「まつ黒→削」「松→削」並木の松の残像が

ほのじろく空に「たゞ→削」「やふ→削」ひかつた

右のことく、39行以下(裏面罫12行目以下)はすべてゴムで抹消されている。この抹消と、先に述べたメモの抹消との先後関係は判然としない。

紙の表の右端欄外、下寄りのところには、大きな字で「草、三」と記入してあり、また26～38行の十三行を四角く囲つて、その囲いの右下角に「草二」と、やや大

右のような表裏の既記入文字をゴムで消した上で、鉛筆の速書き文字で、表の罫の第二行目から次の詩句が書かれている。

筆の速書き文字で、表の罫の第二行目から次の詩句が書かれている。

きな字で記入してある。いずれも鉛筆使用。

次の詩句を記入してある。

右に對して紫色鉛筆で次の手入れがなされている。

8行 ほのかに睡る「いちいちの↓」棟「を↓々の／

いくつをつぎつぎ数へたことか】

9~14行 (この六行に×印。10~11行には次の手入れもある)

10行どこからともわからぬ稻のかほり「に漂ひと」と】

11行つかれたこほろぎ「の声↓」や水の呟き「⑦」

↓の↓】

さらに、同じ紫色鉛筆で次のように順序の指定をしてある。

並木の松の向ふの方で

いきなり白くひるがへるのは

どれか東の山地の尾根だ

(祝られざるもの)

神には神の身土がある)

さざざざざの灰いろの線

(まこと正しい道ならば

誰が考へ誰が踏んだといふ「⑦」

も」のでない

そこには道があるだけ「だ↓」な

のだ)

15こゝはたしか五郎沼の岸で

西はあやしく明るくなり

くつきりうかぶ松の脚には

一つの星も通つて行く

……今日のひるまごりごり鉄筆で引いた

6行行頭と9行行頭に小さな丸印を付け、その二つの丸を横線で結んで、上方へ線を出し⑤と記入。

10行の行頭に横線を引き、上方へ⑥→と記入。

(第三葉)

本葉表は、もと、野を横に使って本巻所収「九〇

「祠の前のちしやのいろした草はらに」下書稿(2)の末尾

六行がブルーブラックインクで一行おきに記入されていたもの(野11行目まで)。それを鉛筆で四角く囲み、ぐるぐる引き回した線によって削除した上で、紙を縦に戻し、残りの野部分と左端欄外に、鉛筆の速書きの文字で

北上川の水部の線が いままつ青にひかれてうかぶ】↓】……  
20こゝはたしか五郎沼の岸だ わたくしはこの黒いど「ろ↓て」をのぼり  
むかし竜巻がその銀の尾をうねらしたといふその沼の夜の水を見やうと思ふ  
……水部の線の花紺青は火花になつてぼろぼろに散る……

右に対して、鉛筆で次の手入れがしてある。(紫色鉛筆の手入れはない)

1~5行 (この五行に×印を付し、上方余白に次のように記したもの、矢印でここへ導入)

正しく強く生きるといふことは  
みんなが銀河「を↓】」の全体を

【ひとつこゝろにもつことだ↓めいめいとして  
感することだ】

11~14行 (この辺りの上方余白に、いたん次のように記したのち、×印等で削除してある)

いちにちいっぽいの労働は  
するぶんくるしいことだけれども

いちばん楽しくなければならぬ

並木の松「の↓】」は象をわかず

つめたい雨は

宙

しかも

の

第三葉裏は、野の1行目から25行目まで、鉛筆の速書きの字で詩句が記されていたのが、すべてゴムで消され、その消しあとにあらためて別な詩句が書かれている。ゴムで消された詩句は、きわめて判読し難く、その中から辛うじて、次のような文字がとびとびに読みとれるに過ぎない。



さういふ風のものでない

それはたゞそのみちみづからに属すると  
答へたものはいつたい何だ

まっくろな並木のはてで  
見えるともない遠くの町が

ほんやり赤い火照りをあげる

(草二)

あ、わたくしの恋するものは  
わたくしみづからつくりださねばならぬかと

わたくしが東のそらに  
声高く叫んで問へば

そこらの黒い林から  
嘲るやうなうつろな声が

ひときれの木だまをかへし  
じぶんの恋をなげうつものは

やがては恋を恋すると  
さびしくひとり呟いて

来た方をふりかへれば  
並木の松の残像が

ほのじろく空にひかつた

ほのかに睡るいちいちの棟を

つぎからつぎと数へながら  
どこからともわからない稲のかほりに漂ひ

つかれたこぼろぎの声や水の呴き

またじぶんともひともわからず

水たまりや泥をわたる跁音を

遠くのそらに聞きながし

から松が風を冴え冴えとし  
銀どろが雲を乱してひるがへるなかに

赤い鬼げしの花を燃し

黒いするもの実をもぎる

頬うつくしいひとびとの

なにか無心に語つてゐる

明るいことばのきれぎれを

(草三)

びしやびしやの寒い雨にぬれ  
かすかな雲の螢光をたよりながら

こんやわたくしが恋してあるいてゐるものは  
いつともしらぬするものころの

なにか明るい風象である  
まことにわたくしはこのまよなかの

杉やいちるに聞まれて

ほのかに睡るいちいちの棟を

つぎからつぎと数へながら  
どこからともわからない稲のかほりに漂ひ

つかれたこぼろぎの声や水の呴き

またじぶんともひともわからず

水たまりや泥をわたる跁音を

遠くのそらに聞きながし

から松が風を冴え冴えとし  
銀どろが雲を乱してひるがへるなかに

赤い鬼げしの花を燃し

黒いするもの実をもぎる

頬うつくしいひとびとの

なにか無心に語つてゐる

明るいことばのきれぎれを

狂氣のやうに恋ひながら  
このまつ黒な松の並木を

はてなくひとりたどつて来た

(草四)

ここはたしか五郎沼の岸で  
西はあやしく明るくなり

ほんやりうかぶ松の脚には  
一つの星も通つて行く

今日のひるま

鉄筆でごりごり引いた

北上川の水部の線が

いままつ青にひかりだす……

わたくしはこの黒いとてをのぼり

むかし竜巻がその銀の尾をうねらしたといふ

この沼の夜の水を見やうとおもう

……水部の線の花絹青が  
火花になつてぼろぼろに散る……

次に紫色鉛筆手入れによる①~⑦の配列を掲げる。

①

祀られざるも神には神の身土があると

どこからともわからぬ稲のかほりと

どうぞ

どうぞ



25 [⑦→こらのやがてのあかるいしき] (ここから裏)

[⑦→落葉松や銀ドロや、『蜜蜂、↓』果樹と蜜蜂、小鳥の巣箱]

[花粉のやう『に↓な』(二字不明)えがく部落部落の小組合が]

[やがてのあかるいしき 落葉松や銀ドロや/

『たくさ→村ごと』小さな組合は、/ハムを[酵母]を[紡ぎ]をつくりもハム『や→』酵母を[紡ぎ]【⑦→や靴や↓

〔⑦〕をつくり】

[二行不明)→その聯合の『巨きな→ある』ものはもその聯合の『産業組合』あるものが、】

石灰抹の稜をひととこ碎き

30 山地の稜をひととこ碎き

石灰抹の『億噸を得ても幾千車『か→』酸えた野原に「そそ『ぎ→ぐ』↓撒いた

〔⑦〕をつくり】

[二行不明)→その聯合の『巨きな→ある』ものはもその聯合の『産業組合』あるものが、】

35 [二行不明)もそれとてまさしくできてのちは】

〔二行不明)もあらたなわびしい図式なばかり】

〔二行不明)もさういふことを考へさせるも〔⑦〕

〔ハム、酵母(七、八字不明)果樹と蜜蜂小鳥の巣箱も背後の

力はいつたい何だも〔⑦〕

……雨がどこかでにはかに鳴り

西があやしくあかるくなる……

32 行 酸えた野原に「撒いたりする→そ、いだりゴムか

ら靴を鋤たり『する→もしやう→もすると』

34 行 (この二行に×印を付して削除)

35 行 (この二行に×印を付して削除)

36 行 (この二行に×印を付して削除)

37 行 (この二行に×印を付して削除)

38 行 (この二行に×印を付して削除)

39 行 (この二行に×印を付して削除)

40 行の前 [⑦→『しかも→』『そ→こ』れら『の→

41 行 [⑦→『しかも→』『そ→こ』れら『の→

志】会合【⑦→商(不明一字を書きかけて消し)量協商

(商量と協商は並べて書)の夜半】

42 行 「なほも↓どこかで」呟くそれは誰だ

なお、本稿紙裏の右下隅辺りに、定稿清書時のものと見られるベン先駆らしの多くの線や「さ」「三」等の書き込みが残っている。

#### (4) 定稿

本稿は、定稿用紙一枚の表裏の罫を用いて、ブルーブラックインクで清書されたもの。一般的の定稿用紙に書かれた作品に比し、やや多めの手直しや手入れが見られるので、特に第一形態を次に掲げて、説明する。

三二三

〔青年→〕産業組合青年会

一九二四、一〇、五、

20 石灰末の幾千車を

15 東に畳む夜中の雲の  
水がかすかにひかるのは  
わづかに青い燐光による……

部落部落の小組合が

ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち  
その聯合の大きなものが  
山地の肩をひととこ碎いて

40 [⑦→あ、誰か來て私に云へ】億の天才ならんで生れ↓  
〔祭→〕祀られざるも神には神の身土があると  
「しかも互ひに相犯さない」なほ呟くそれは【誰→】  
誰だ】

【あかるい世界はかならず来るとも〔⑦〕】

右に対し、ブルーブラックインクで次の手入れがしてある。

1→3行 (上方余白に「1」と記入)

4→5行 (上方余白に「2」と記入)

6→11行 (上方余白に「3」と記入)

12→15行 (上方余白に「4」と記入)

16→20行 (この五行に×印を付して削除)

21'→23行 (この三行の上方に横線を引き、「6」と記入)

25→26行 (この二行を縦線で削除)

27→32行 (この六行の上方に横線を引き、「5」と記入)

28行 ハム「を→や→をつくり」酵母「を紡ぎをつくり

↓『や→』をつくり『ホームズパンを→』医薬を頒ち

30行 [⑦→陰気な雲をかぶつた→]山地の「稜→肩」をひととこ碎「き→いて」

29行 その聯合の「あるものが、→大きなものが

30行 [⑦→陰気な雲をかぶつた→]山地の「稜→肩」をひととこ碎「き→いて」

ゴムから靴を鋲たりもする

(ここまで表)

くろく沈んだ並木のはてで  
見えるともない遠くの町が

(ここから裏) ほんやり赤い火照りをあげる……

こ〔ら→印〕れら村々の氣鋭な同志会合の夜半

祀られざるも神には神の身〔二字不明〕→印 土があると

老いて呴くそれは誰だ

右に対する手入れは次のとおり。①は第一形態と同じ

ブルーブラックインク、②はやや太く濃いブルーブラッ

クインク使用。

3行 さう云つたのはいったい誰だ〔坤→印席〕を「ゆ

す→印わた」つたそれは誰だ

18行 「その→印村ことの『も→印』のまたその」聯合

の大きなものが

20行 石灰〔印→印岩〕末の幾千車〔印→印か〕を

21行 「荒れた→印酸えた」野原にそいだり

22行 ゴムから靴を鋲たり「もする→印もしやう」

26行 「印→印しかも」これら〔印→印熱誠有為な〕

村々の「氣鋭な→印」「同志→印處士」会〔合

→印同〕の夜半

以上の手入れ結果を本文に掲出した。

のようなブルーブラックインクによる書込みがある。右  
発表用原稿清書に先立つてのメモかとも見られる。  
(紙面右半部。丸番号も自筆)

① 〔席→闇〕を↓松を↓草を『わたつた→印』ゆす  
つたそれは誰だ

② いきまき応へたそれは何だ

〔印→印しかも〕『これ→印』これら〔の→印〕〔印→印

高意→印〕熱誠有為〔の→印〕村々の處士会同の  
夜半

(紙面左端に天地逆に)  
村ごとの家、米〔穀→印〕と果実と――(傍み)  
を纏め、

三一四 「夜の温氣と風がさびしくりまじり」  
(本文二三九頁)

〈現存稿〉五。  
下書稿(一)、下書稿(二)、下書稿(三)(切抜き断片)、下書稿

四、定稿、以上三枚五面および切抜き断片一)。

〈生前発表〉なし。

〈本文〉 定稿の最終形態に換る。

〈逐次形〉

なお、本篇は、さらに一部の推敲を経て、寺田弘編

輯・発行の同人詩誌「北方詩人」十月号(福島県須賀川

町東八丁目三八 北方詩人会、昭和八年十月一日発行)  
の9頁に掲載された。死後発表であるが、原稿(現存せ

ず)は生前に編輯者へ送っていたものと考えられる  
(第十五卷所収書簡488参照)。この発表形は本全集第六卷

に収録されるが、本卷本文に掲げた定稿の最終形態との  
異同は拗音を除き次のとおり。

1行 「身土」にルビ「しんど」を付す

3行 「さう云つたのはいったい誰だ」を削る

4行 〔いずれも詩句は二字下ヶで、4行行頭に二字分の「……」〕

11行 「應へたものはいったい何だ」を削除。「應」にルビ「こた」  
を付す

12行 〔いずれも詩句は二字下ヶで、12行行頭に二字分の「……」〕

21行 〔行にルビ「す」を付す〕

23～25行 〔いずれも詩句は二字下ヶで22行行頭に二字分の「……」〕

また、昭和八年九月十一日付、柳原昌悦宛書簡下書  
(洋半紙使用。第十五卷所収書簡488下書一)の裏面に次

〔洋半紙使用。第十五卷所収書簡488下書一〕の裏面に次

### (1) 下書稿(一)

本稿の第一形態は、赤黒詩稿用紙一枚の表(裏面は本  
篇下書稿(二)の跡を用いて、鉛筆できれいに書かれたも  
の。内容は次のとおり。

### 三一四

#### 葉の花びら

一九二四、一〇、五、

夜の湿氣とぬむけがさびしくりまじり

松ややなぎの林はくろく

そらには暗い葉の花びらがいっぱい  
わたくしは神々の名を録したことから

5はげしく寒くふるえてゐる

ああたれか来てわたくしを抱け〔印→二字不明〕〔?↓

か〕ら選んだ險〔いみちよ印〕

〔行不明〕→印〔二行あけ」と記入〕

しかもいったい

たれがわたくしにあてにならうか

10どんなことが起らうと

わたくしはだまつてあるいて行くだけだ

〔行あきなし〕→〔二行あけ」と記入〕

……どこかでさきが鳴いてゐる……

〔行あきなし〕→〔二行あけ」と記入〕

春と修羅 第二集